

舘野泰一・中原淳など(2016)

「アクティブトランジションー働くためのウォーミングアップ」の分析

【発表構成】

- I.はじめに
- II.これまでの「研究と実践の関係」
- III.望まれる「研究と実践の関係」
- IV.アクティブトランジションの概要
- V.おわりに

I.はじめに

本発表の目的は、舘野泰一・中原淳など(2016)「アクティブトランジションー働くためのウォーミングアップ」(以下、本書とする)について、これまでの「研究と実践の関係」の概要とそれが抱える問題点、また、その問題点を克服する手立てと問題点が克服された「研究と実践の関係」の具体例を明らかにしていくことを通して、これから望まれると考えられる「研究と実践の関係」とはどのようなものなのかという問いについて明らかにすることである。そこで、本稿におけるRQとSQを以下のように設定する。

RQ: 望まれる「研究と実践の関係」はどのようなものか。

SQ1: これまでの「研究と実践の関係」はどのようなものか。

SQ2: これまでの「研究と実践の関係」の問題点はどのようにして克服されるか。

SQ3: 望まれる「研究と実践の関係」とは具体的にどのようなものか。

II.これまでの「研究と実践の関係」

これまで多くの研究、実践が我が国、そして、世界でなされてきたが、この両者の関係のほとんどは、研究者が生み出した研究知見を論文化・書籍化し、その研究知見が実際現場に役立てられるか否かは実践者の判断次第という関係であった。生み出された研究知見が実践者に実践されず、さらには読まれることもなく同業者の中で消費されるのに留まり、現場に多大なコストをかけて実施された調査研究から得られた知見が現場に返ってこないということがほとんどという事態が研究と実践の間では続いてきていた。このような事態が起きている理由として、研究と実践の間に存在する2つのクレバスが挙げられる。

1つ目のクレバスは、「専門用語・学術の難解さゆえの断絶」である。研究の世界においては厳密な学術用語、専門的な概念、高度な分析を用いることが多く、研究者にとっては研

究者同士で知識共有するためや自らの研究を進めるためにもこれらを理解することは必要不可欠である。しかし、一般の実践者にとっては縁遠い世界のことであり、非常にとっつきにくいものとして捉えられてしまうのである。実践者にとって驚きのある研究知見であっても、その中に高度な概念、専門用語が含まれていることによって、実践者はその研究知見を知ろうとはせず、もちろん、それが解釈、活用されることも無い、つまり、実践の場において大きく寄与すると考えられるような研究知見であっても研究の世界に留まってしまう。ここにクレバスが存在するのである。

2 つ目のクレバスは、「研究知見を現場に適用する営為に付随する不可能性」である。研究知見といったものは現場で起こっている個々の出来事や現象を抽象化した知識体系のことで、人々の行動や認知をある程度の精度で予測したり、コントロールしたりすることができるが、それはある程度に留まり、完全に予測、コントロールできるものではない。研究知見の適用対象となる人間は複雑さをもち、非常に多様であるがゆえ、生み出された研究知見がどれほど優れたものであろうとも、それを適用すれば必ず現場は改善されるとは限らない。ここにもクレバスが存在するのである。

この 2 つのクレバスが研究と実践の間に存在することで、よりよい研究知見であっても実践者によって活用されない、研究者から実践者のいる現場へもたらされるのは研究のための負担のみという両者とも報われない事態が生じているのである。

上記の内容から、SQ1 に対して以下のような答えが導き出せると考える。

SA1：これまでの「研究と実践の関係」とは、研究知見が実践者によって用いられず、現場には研究の負担がもたらされるというものであり、その原因として、研究知見に含まれる専門的な用語や概念が難解であるがゆえに実践者が研究知見を用いない、また、研究知見は多様な人を対象とする実践の場面において完全に効果を発揮しないという 2 つのクレバスの存在が挙げられる。

III.望まれる「研究と実践の関係」

前述した 2 つのクレバスは、これまでの「研究と実践の関係」をよりよいものにするうえでの問題点と捉えられよう。では、この問題点はどのようにして克服されるだろうか。著者らはこの問題点の克服のための方策として 3 つの概念を取り上げている。

1 つ目は、「理論にインスパイアされた実践」である¹。これは理論全てを実践に適用するのではなく、そこから抽出されるエッセンスを実践に適用していくことを意味するものである。

2 つ目は、「実践者のエンパワーメント」である。これは、「研究者はあくまで研究者であり、最終的に現場の実践を変えるのは実践者である」というインスピレーションと「この実

¹ここから先用いられる「理論」という言葉はこれまでに述べてきた「研究知見」と同義であるものとする。

「実践はやろうと思えば自分でもできるかもしれない」という自己効力感を実践者に感じさせる働きかけを行うことを意味するものである。

3つ目は、「パフォーマーとしての研究者」である。これは、研究者が理論を提起するにとどまらず、実際にワークショップなどをデザインし、ワークショップデザイナーやファシリテーターとしての役割を果たすことを意味するものである。

この3つの概念と現場の関係を図で表すと図1のようになる。

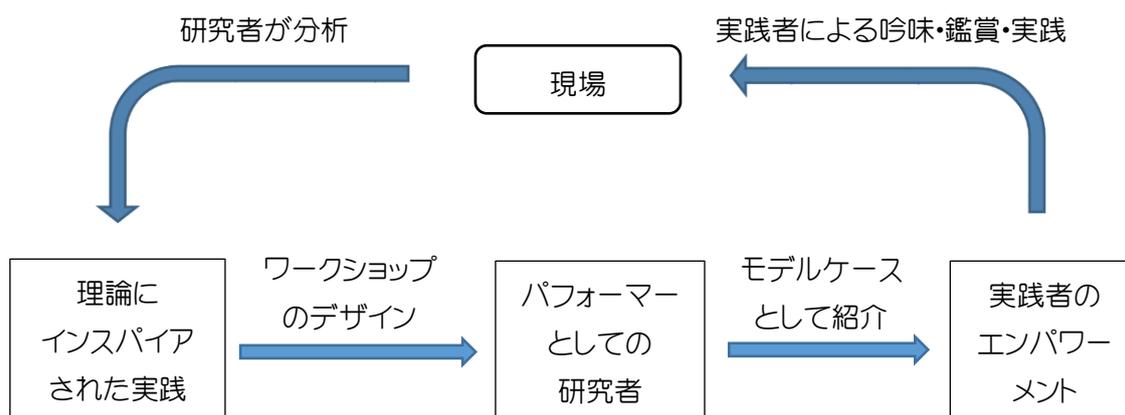


図1 3つの概念と現場の関係図(本書 P15 より引用)

ある理論から抽出されたエッセンスを実践の中に組み込むという形をとりながらワークショップをデザインし、そのデザインされたワークショップをモデルケースとしてワークショップデザイナーやファシリテーターの立場から紹介する。こうして紹介されたワークショップを実践者が見せ、「自分にもできるかもしれない。」と思わせることで実践者とそのワークショップを吟味し、実際に現場で実践することとなり、その実践を研究者が分析した結果を理論のさらなるエッセンスとして、また実践に組み込んでいくというサイクルを図1は示している。

この3つの概念とそれらによってもたらされるこのサイクルは、「研究知見に含まれる専門的な用語や概念が難解であるがゆえに実践者が研究知見を用いない」、「研究知見は多様な人を対象とする実践の場面において完全に効果を発揮しない」という2つの問題点を克服する。

まず、「研究知見に含まれる専門的な用語や概念が難解であるがゆえに実践者が研究知見を用いない」という問題については、「理論にインスパイアされた実践」から「自分にもできるかもしれない。」と思わせる「実践者のエンパワメント」までの過程を行うことで克服することができる。つまり、「理論にインスパイアされた実践」と「パフォーマーとしての研究者」を経て可能となる「実践者のエンパワメント」を行うことで、実践者に「自分にもできるかもしれない。」と思わせ、理論に含まれる難解さゆえに理論を用いないという

問題を克服するのである。

次に、「研究知見は多様な人を対象とする実践の場面において完全に効果を発揮しない」という問題に対しては、「理論にインスパイアされた実践」から実際に実践者が実践し、その実践結果を研究者が分析し、その結果を理論として、再び「理論にインスパイアされた実践」に戻るといった一連のサイクルを行うことで克服することができる。つまり、実践者の実践結果からより多くの人にとって効果的な実践にするためのエッセンスを抽象し、それをまた研究者が実践に組み込んでいくことで、多様な人を対象に理論は完全に効果を発揮しないという問題を完全には克服できないが、段階的に克服するのである。

このことを図で表したのが図2になる。

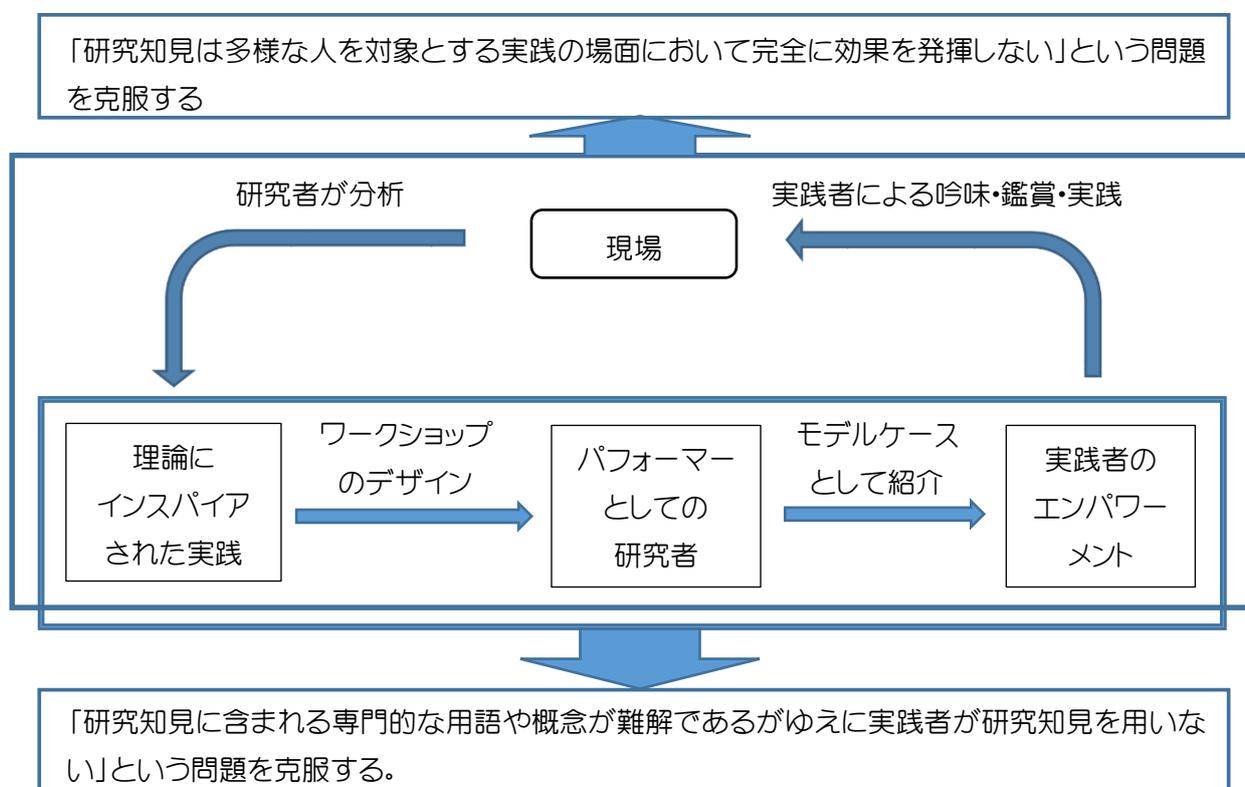


図2 2つの問題と3つの概念の関係図(発表者作成)

上記の内容から、SQ2に対して以下のような答えが導き出せると考える。

SA2：これまでの「研究と実践の関係」の問題点は、「理論にインスパイアされた実践」から「実践者のエンパワメント」までの過程を経ること、また、その「実践者のエンパワメント」から実践者が実際に実践を行い、研究者がその実践の分析の結果を「理論にインスパイアされた実践」へと結びつける一連のサイクルの過程を経ることによって克服される。

IV. アクティブトランジションの概要

ここまででこれまでの「研究と実践の関係」の問題点が克服されることにより、よりよい「研究と実践の関係」、つまり、望まれる「研究と実践の関係」が見えてきた。ではこの望まれる「研究と実践の関係」として具体的にどのようなものが挙げられるだろうか。著者らはその具体例としてアクティブトランジションの支援の方策を挙げている。

「アクティブトランジション」について著者らは以下のように説明している²。

「アクティブトランジションとは 1)教育機関を終え、仕事をしはじめようとしている人々が、働きはじめる前に、仕事や組織のリアルをアクティブに体感し、働くことの準備をなすこと、その結果として、2)教育機関から仕事領域への円滑な移行(トランジション)を果たすことをいいます。」

バブル崩壊以降の時代、安定的なフルタイムの職業に就職することが困難になるだけでなく、社会人になる過程において躓きを覚える学生が多く見られるようになってきた。例えば、以下のような学生が挙げられる。

- ・就職活動という活動に興味をもてず、そこから逃走してしまう学生
- ・就職活動を乗りきることができず、結果にいらだち、心が折れてしまう学生
- ・就職活動は何とか乗りきり、めでたく安定的なフルタイムの職業の内定を得たものの、本当にこのままでよいのか考えあぐねてしまう学生
- ・内定式を終え、内定者教育が始まると、次第に自信を失っていく学生
- ・無事入社したものの、教育訓練の途中で、意欲を喪失し、早期離職してしまう学生
- ・配属後、思い描いていた理想の仕事の姿と現実に苦しみ、仕事を辞めてしまう学生

そこで、これらのような学生が教育機関から仕事領域へと円滑に接続を実現できるように著者らが提起しているのがこの「アクティブトランジション」という概念であり、この「アクティブトランジション」の支援の方策についても著者らは提起している。この支援の方策が望まれる「研究と実践の関係」の具体例とされている。

では、どのようなものを支援の方策として挙げているのだろうか。本書においては支援の方策として3つ取り上げている。それをまとめたのが表1になる。

² 本書 P10 より引用

表1 3つのアクティブトランジションの支援の方策（本書P175より引用）

	対象	ねらい	ゴールの状態
就活ヒッチハイク	就職活動前 (3年)	「ヒッチハイク」を体験することで、就職活動の不確実な環境に対応する心構えを知る。	「ひとりで、なんとなく」という状態から「他者に協力を求め、目的意識をつくる」という状態へ変化する。
カード de トーク いるかも!!こんな 社会人	就職活動後 (4年)	就職活動を「人」の視点から振り返り、仕事観を知る。	就職活動中に会った社会人を相対化し、自分の仕事観を知ることができる。
ネガポジダイアログ	就職活動前 (1・2年)	社会人生活を「写真」をもとに対話し、社会人生活をリアルに知る。	社会人生活に対する現実的な期待感をもつことができる。

ここでは、紙幅の都合上、「ネガポジダイアログ」についてのみ、その概要を取り上げ、それがどのように望ましい「研究と実践の関係」の具体例となっているかについて説明する。

「ネガポジダイアログ」とは、大学1・2年生を対象としたもので社会人に日頃の仕事生活におけるネガティブなところとポジティブなところの写真を撮ってきてもらい、それらをモチーフとして社会人と深い対話を行うことで、社会人生活に対する具体的なイメージをもち、就職後に「イメージしていた社会人生活」と「リアルな社会人生活」のギャップに苦しむことを回避し、最終的には、社会人生活に対する現実的な期待感をもつことがねらいとされるワークショップである。

このワークショップという実践は、吉村春美氏の「大学生の就職活動における他者からの支援は入社後の組織コミットメントにどのように影響を与えるか～リアリティ・ショックの媒介効果に着目して～」という研究論文と館野泰一氏の「職場で主体的に行動できる人は、どのような大学生活を過ごしてきたか～大学での学び・生活が入社後のプロアクティブ行動に与える影響～」という研究論文における理論を用いているものである。

具体的には、吉村氏の論文からは就職活動における相談相手をもつことは重要であるという理論が抽出され、これをもとに相談相手をつくるという実践が、また、館野氏の論文からは自分とは異なる学年や所属の異なる他者との接点が重要であるという理論が著者らによって抽出され、これをもとにOB・OGとの接点をつくるという実践が開発されている。これが「理論にインスパイアされた実践」に該当し、これらの実践を1つのワークショップの中に盛り込み、デザインすることが「パフォーマーとしての研究者」に、そして、そのワークショップが先に示した概要から分かるように非常にやりやすいと受け止められるもの

にすることが「実践者のエンパワーメント」に該当する。この3つの概念をしっかりとおさえた過程を経ること、また、この提示されたワークショップを実践者が実践し、その実践を研究者が分析して得られた理論を、実践をインスパイアする材料とすることで望まれる「研究と実践の関係」が成立していると捉えられる。このようにしてアクティブトランジションの支援の方策は望まれる「研究と実践の関係」の具体例の1つとして列挙される。

上記の内容から、SQ3に対して以下のような答えが導き出せると考える。

SA3: 望まれる「研究と実践の関係」の具体例として、研究者が就職活動における相談相手をもつことは重要であるという理論や自分とは異なる学年や所属の異なる他者との接点が重要であるという理論を抽出し、それを実際の社会人の生活風景を写した写真を通して社会人と大学生が対話するという取り組みやすいワークショップの開発に繋げているアクティブトランジションの支援の方策が挙げられる。

また、これまでに導き出したSA1、SA2、SA3よりRQに対して以下のような答えが導き出せると考える。

RA: 望まれる「研究と実践の関係」とは、研究は実践に対してより実践のエッセンスになるような理論を抽出し、そこから実践しやすい実践を提示する一方で、実践は研究によって提示されたものとして行われ、その結果を研究にフィードバックするというサイクル、デザイン研究のようなものであり、一例として、アクティブトランジションの支援のためのワークショップ開発に用いることができるものである。

V. おわりに

本発表は、この講義の「導入：開発的・実践的研究の方法論のレビュー」において、また、全体において一体どのような位置づけになるのであろうか。これまでの発表は、まずデザイン研究の原理から始まり、大学カリキュラム、教科教育学、教師、授業の改善、成長を目的としたデザイン研究について述べられていた。この流れに即して言うならば、本発表は大学生から社会人への円滑な移行を目的としたデザイン研究であったという意味で特徴づけられよう。しかし、本発表はそれだけの側面をもつには留まらないと考えられる。本講義全体のねらいとして、「平和科目」の授業モジュールを開発することが挙げられている。この授業モジュールはワークショップの形式で行われることが大いに想定されるものである。であれば、この授業モジュールの開発に、本発表で取りあげたアクティブトランジションの支援のためのワークショップ開発に用いられた、望まれる「研究と実践の関係」としてのデザイン研究の視点は大きく寄与する可能性があるのではないかと考えられる。